

# 社会主義チェコスロバキアにおける女性像の変容過程

石倉 瑞恵\*<sup>1</sup>

## 要 旨

社会主義はジェンダーを克服し、女性の解放を導いたのか。本稿では、旧チェコスロバキアにおける労働者としての女性像の変容に着目し、社会主義期の女性解放の本質を検証した。社会主義は、伝統的な家制度を解体して女性の雇用を促進させたが、その施策のすべてが女性解放ではなく、健全な社会主義国家建設を意図していたため、働く女性の増加に伴い少子傾向が顕在化すると、施策は女性解放から後退し、結婚、家族、子育てこそが社会主義の課題であると社会主義の本質を再解釈した。女性像は、社会主義初期のイメージである国営農場に働く生産労働者から変容した。社会主義後期における女性像は、労働力の主力であるブルーカラーと相反する。すなわち、家事・育児を担い、男性においては評価されない優美さを持ち合わせ、男性の職業領域を犯すことがない労働者、前社会主義的な女性像であり、男性にとっての好ましい他者であることが明らかになった。

キーワード：チェコスロバキア／社会主義／ジェンダー／女性像／家庭

## 1. はじめに

社会主義思想は、すべての人を労働者とみなし、ジェンダーという概念から解放しようとした。20世紀後半、旧ソ連を中心とする東欧社会主義圏では、女性が古い制度から解放されて社会に活用され、保育施設の普及、産休の充実など、世界に先駆けた女性雇用施策を展開した。現在もなお、社会主義が形作った社会通念や文化は何らかの影響を残している。東西に分離していたドイツを統一後の旧東西間で比較するとその影響がわかる。例えば、旧西側では半日保育の幼稚園が主流であるのに対し、旧東側では全日保育の割合が比較的高い。旧東ドイツでは女性の雇用と保育施策が進んでいたことを示唆する。

女性は家事・育児から解放され生き活きと働いている（注1）、1950年代から70年代にかけてそのような社会主義女性のイメージが日本や西欧に伝播した。本稿の目的は、旧チェコスロバキア（以降は、単にチェコスロバキアと表記）に焦点化して、そのイメージの真偽を検証することにある。女性の雇用施策は真の女性解放となったのか、社会主義初期から終盤にかけて女性の役割やイメージは単一であったのか、あるいは変容したのか、そこにはどのような理念や思想が介在したのかについて明らかにしたい。

旧社会主義国に「ジェンダー」という西欧の概念が浸透し始めたのは1989年の社会主義崩壊後であるので、現チェコのジェンダー研究には多くの実績があるわけではない。また、ジェンダー研究のみならず、社会主義期をテーマとした社会学的研究には体制崩壊から長い沈黙の期間があった。しかし、1994年にはポスト社会主義国のジェンダー・ポリティクスに関する比較研究（Funk・Mueller, 1994）が存在しており、チェコのみならず、ブルガリアやユーゴスラビア、ルーマニア、ポーランドの体制崩壊以前から以後にかけての女性をとり巻く施策の変化が報告されている。

社会主義は、触れることが憚られる歴史ではない。当事国の社会科学的研究は、社会主義を評価・検証する研究対象としてとらえており、社会主義の実証となる資料を整理し、政治学、文学、人類学、社会学等様々な分野からのジェンダー研究を生み出している。

例えば、社会主義期チェコスロバキアの大衆文化資料をまとめたラドナーク（Radnák, 2011）やペトロフ（Petrov, 2015）の著作は、当時の女性の文化を知る原資料として貴重である。ザーブロドスカ（Zábrodská, 2014）は社会主義期の聞き取り調査に基づいて、ハナコヴァー（Hanaková, 2014）は、社会主義期の映画を通して、またオーツ・インドルホヴァ（Oates-Indruchová, 2014）は社会主義期の小説から、それぞれに女性のアイデンティティに関す

\*1 石川県立大学 生物資源環境学部 教養教育センター

る分析を行っている。ロウバル (Roubal, 2014) は、チェコスロバキア共産党プロパガンダ映像の分析を通して、政治的に形成されたジェンダーを明らかにしている。

すべての先行研究で一貫して示されていることは、社会主義期を一括して評価することはできないという点である。社会主義初期に展開した理想論は1960年代以降に崩壊し変容を遂げたことが明らかである。本研究では、社会主義期の女性雇用施策や家族政策と先行研究を総括的に分析し、社会主義が作り上げた女性像、理念から現実への変容過程とその要因を明らかにする。

## 2. 社会主義を女性解放の先駆とする事実

日本や西欧諸国と比較して旧社会主義国が女性解放のパイオニアであったと考えるのは、以下の二つの事実による。

第一に、女性の雇用促進である。チェコスロバキアでは1948年の共産党政権移行直後から、社会主義の理念に即した女性の雇用促進施策が急速に推し進められた。対して同時期の日本は1955年に高度経済成長を迎えると、女性に対しては企業労働者を支える専業主婦というライフコースが推奨された(石倉, 2021, 107-108)。広く浅い学びを行う短期大学家政学科が増加し、家政学科等を卒業した女性が数年の勤務を経て専業主婦になるライフコースが根付いたもこの時期である(注2)。1985年には男女雇用機会均等法が定められるも、男女コース別人事を前提とした差別ありきの法制定であり、女性は30歳までに「寿退社」を迎えることが一般的とされた。

第二に、西欧および第二波フェミニズムに先駆けて、チェコスロバキアでは1958年に中絶が合法化された。対して、第二波フェミニズムの生起は1960年以降であり、中絶の合法化に至るには、女性の経済的自立から自身の身体をコントロールする権利の獲得へと、多くのプロセスを経なければならなかった。フランスでは1965年民法改正を機に、夫婦財産制、合意離婚が認められ、女性の経済活動の自由、家庭の縛りからの解放へと一步を踏み出したが、中絶・避妊が認可されるにはさらなる時を要し、女性が産まない権利を獲得したのはようやく1976年のことであった(注3)。

女性にとっての古き慣習からの解放、経済的自立は、社会主義国家では政権移行直後に法的障壁を払拭することにより成し遂げられたように思われる。早期の実現は評価される点ではあるが、実質的な女性の自立を意図していたのか、社会変容に結びつく成果があったのかについて検証する必要がある。

## 3. 社会主義初期の女性解放

### (1) 社会主義以前の状態

1918年にハプスブルク帝国からの独立を果たした際のチェコスロバキア共和国憲法には、すでに女性参政権等の男女平等条項が盛り込まれていた。女性の教育権・参政権への意識の高さは、19世紀後期から20世紀初頭にかけての女性運動の成果、および自身フェミニストであった初代大統領マサリクの思想に帰するところが大きい(石倉, 2014, 22-23)。19世紀末には女性の高等教育進学実績が挙がっており、医師や教員、エンジニア等、実数は少ないものの、比較的多様な分野で活躍する女性が現れ始めていた(石倉, 2017, 61)。

女性の社会進出は認められつつあったが、家庭における女性の地位は共和国発足後も低いままであった。社会主義政権発足時には、1811年民法のいわゆる家長規定が有効であった。そこには、家長である夫が家に関する決定権をもち、妻を導いて彼女の援助を得ることができると夫と妻の関係性が明示されていた(Burešová, 2016, 21-22)。妻が財産を形成することも許されていなかった。その規定通り、家庭では夫が居住地、家計の維持と子どもの扶養に責任と決定権を行使し、妻は日々家族の世話をするという役割分担が根付いており、家長に従順であることが妻の道徳とされていた。

### (2) 雇用と家庭における女性の権利

社会主義が依拠する理念の一つは、人間の本質を労働とみなすことにある。「もっとも進歩した国々にとっては(中略)すべての人々に対する平等な労働強制」が適用されうると『共産党宣言』に記されているように(マルクス・エンゲルス, 1995, 69)、だれもが平等な労働者となることは社会主義実現の核となる。

東欧社会主義国では、政権移行後「すべての人々に対する平等な労働」を阻んでいるのが女性をとり巻く伝統的な家制度や慣習にあるとみなし、伝統を解体するとともに女性労働を促進しようと様々な施策を打ち立てた。チェコスロバキアでは、1948年憲法が労働の義務を謳い、あらゆる職種への男女の平等なアクセス、男女間の賃金の均一化を定めた。

1950年には、改正民法が家庭での女性の従属的地位を強いていた夫婦関係の実質的平等を定め、女性の財産形成、夫婦間での財産の共同管理を可能とした。また、嫡出、非嫡出に関わらず、離婚後には、夫が子どもの経済的責任を担うとし、養育費の支払いに公的組織が関与することとなった(Havelková, B., 2014, 33-35)。父親が子どもを支援する義務を社会的義務とみなすゆえであるが、これは、社会主義

における雇用主である国家が、親の労働に責任を持つ、すなわち雇用を保障するということをも意味している。

1950年民法のさらなる重要な点は、合意離婚を可能にした点にある。同時に、離婚後、夫が経済的手段を持たない元妻を扶養する義務はなくなった。その意図は、女性の完全雇用と経済的自立を促進することにある（Havelková, B., 2014, 34）。

### (3) 社会主義初期をどう評価するか

1950年民法が女性の労働と財産形成への自由を認めたことにより、女性は古き家制度から解放された。しかし、女性の労働権・財産権の確立の背景に真の男女平等の実現という認識があったかという点に関しては疑問が残る。平等な労働という建前とは裏腹に、戦後の著しい労働力不足を背景として、より多くの労働力が必要とされていたにすぎないとも考えられる。

中絶合法化に関しても、その目的から検証すれば、女性解放とは異なった認識から生じたことが明らかである。社会主義政権下では、高齢出産、多子、経済的問題を抱える家庭や崩壊家庭・未婚女性の出産、犯罪等による不本意な出産を回避し、社会主義国家発展に帰する家族の健康的な発展と公衆衛生へ寄与することが目的であった（Havelková, B., 2014, 35）。多くの女性のデモンストレーションによる中絶宣言、女性保健相による国会での多数の反対派の論破を経て、女性の解放そのものを勝ち得たフランスのように、女性が自身の体をコントロールする権利として認められたものではない。

離婚についても同様に問題を残していた。離婚の合法化は、女性の多様なライフスタイルを受容する意図があったわけではなく、雇用促進のギミックにすぎなかった。ゆえに、未婚女性の子どもが社会悪とみなされる認識は変わることがなく、合意離婚や女性の経済的自立が可能になったといえども、結婚は経済的・政治的良質環境とみなされる傾向にあった。

真の女性解放が成し遂げられなかったと考える最大の論点は、家事・育児の分担についての言説が生まれなかった点である。女性の雇用を促進するための家事・育児の社会化と称し、職場、学校敷設カフェテリア等が設けられたりしたが、働く女性のための女性補助事業であり、家事・育児を女性の仕事とする認識は変わらないままであることが示唆されていた。言うまでもなく豊かな産休保障は、女性対象のサービスであった。

そのことを裏付けるように、国営企業（注4）は社会主義初期から様々な家電を開発した。洗濯機、

アイロン、調理家電などである。その広告キャッチコピーはいずれも速さを全面にアピールしており、当然のように女性モデルが登用されていた。ペトロフ（Petrov, 2015, 216）は「社会主義期の家庭には伝統的役割分担があり、男性が仕事から帰ってきた女性を手伝うことは一般的ではなく、家事を効率化することへの解決策が模索され続けてきた」と、社会主義期の家庭の実態と家電の需要の関係について述べている。

このように考えると、女性労働の解放に先駆けていたと考えられる社会主義施策は、雇用促進に結びつく表面的法整備に止まり、根本的なジェンダー認識や家族認識の変容を伴わないがゆえに、当初から矛盾を抱えていたと言えるのである。

### (4) 働く女性イメージの形成

政策ありきの女性のライフコース変容、すなわち女性が家庭の外に出て働くというライフコースへの転換は、当初、当事者である女性の意識変容すらも伴っていなかった。

女性の意識変容へのファシリテーターとして貢献した中に女性団体の存在がある。チェコスロバキアの女性団体の活動は、他の東欧社会主義国の中で比較的活発であったと言われる。社会主義初期の女性評議会（1948-1950年）、およびチェコスロバキア女性連盟（1950-1952年）は、個人会員からなる組織であったので（Nečasová, 2014, 62-63）、共産党から派遣された代表者からなる組織とは異なり、共産党の意向に沿った活動の範囲内とはいえども、主体的に入会した会員の意志に基づくイニシアチブを実現することができた。

初期の二つの女性団体は、集団保育の教育的メリットを説くこと、女性のリクルート活動を行うこと、および働く女性の家事・育児支援を構築することなどに精力的にとり組んだ。1950年には女性就業サービスセンターが発足し、求職女性に仕事を斡旋するとともに、求人情報、保育所の空き、工場の食堂、未就職女性の数などの情報収集業務にあたった（Nečasová, 2014, 69-70）。

女性のリクルート活動は、ラジオや新聞を通じたキャンペーン活動として日常的に行われていた。ラジオ放送では、前衛的女性労働者であるトラクター運転手が出演することもあり、彼女達の体験談、女性が賃金を得ることのすばらしさなどが語られた。

重工業の現場で働く女性も増えたが、トラクター運転手は最も好ましい、そして他の社会主義諸国においても好んで用いられる働く女性像であった。社会主義が都市と農村の格差を解消し、工業と農業とを連携させた国営企業の形成を目指していた（マル

クス・エンゲルス, 1995, 69) ことを考えれば、集団農場で働く女性をモデルとして、伝統的農村形態を改革し、農業革新を進めることへの影響力となることをねらっていたと考えられる。女性の雇用を喚起するポスターには、洗練されたトラクター運転手が映写されていた。ベレー帽をかぶり、つなぎの上にジャケットを羽織ろうとトラクターの前でポーズをとる女性モデルを採用したポスターは、当時最も人気があった広告媒体の一つである (Nečasová, 2011, 337)。

#### 4. 折り返し地点としての 1960 年代

##### (1) 母性の強調

女性が外で働き、家事・育児の不足は公共サービスで補うという女性労働者のライフ・モデルは 1950 年代に浸透したものの、ほどなく限界に達した。

働く女性の増加に伴い少子傾向が顕著となったからである。政権は社会主義国家繁栄のために人口増を必須と捉えつつも、女性の雇用促進と人口増が両立しえないという矛盾に直面することになった。さらに、戦後の労働力不足に対して十分な労働力が充当されるや、今度は労働力が過剰傾向となった。また、女性の労働賃金は必ずしも高いわけではなく、家事・育児の社会化は低収入女性の需要に見合っていないことが明らかとなった。結果的に、家事・育児サービスが国家支出を圧迫し、家事・育児は各家庭で担うほうが経済的メリットは高いとみなされた。

1960 年代になると、女性労働をとり巻く施策は大きく転換した。家事・育児の公共サービスは縮小し、女性が在宅し家事・育児を担っている状態を健全とみなして、その健全なる共働き家庭へのサポートが付与されることになった。育児保障や産休制度は一層充実し、女性の労働は、家庭、育児における女性の役割を果たしたうえであるべきものとして母性の社会的重要性が強調された。

法改正もまた、女性解放からの後退の方向で進んだ。1965 年労働法の改正では、女性労働に特別待遇が付与される規定が成立した。育児中の女性労働者の授乳休憩・勤務時間に関する調整、出張禁止、解雇からの保護等である。1960 年代に徐々に延長した育児休暇は 1969 年には 26 週になり、1968 年には 1 年、1969 年には 2 年の追加休暇の取得が可能となった (Havelková, 2014, 42)。これらの特別待遇は、女性の持続的就労のための施策というよりは、女性に母親としての役割を重視させる意味合いのほうが強かった。さらに、夜勤や特定の職種への女性就労は禁止された。特定の職種とは、重労働、生物・

化学的薬剤等を用いる現場、製造過程等での労働であり、出産を担う女性の身体を保護するという意図がある (Havelková, 2014, 43)。しかし、これらは社会主義期においては最も稼ぎのよい生産労働であり、女性は高賃金の職種にアクセスする機会を奪われることになった。社会主義期間を通して、女性と男性の所得格差がなくなることはなく、むしろ大きくなる傾向にあった。女性雇用施策の目的は、母性保護という名分のもと出生率を改善し、女性の役割としての育児を定着させることにあった。

出生率上昇に資するよう人工中絶法も改正された。1961 年には男性あるいは両親の立ち合いがなければ施術ができないとされ、不本意な妊娠から女性を保護する法律としての機能を失うことになった。当初無償であった費用は 1963 年には有料となり、翌年には値上げが実施された (Havelková, 2014, 41)。また、党中絶委員に占める医療担当者数を減少させ、その反面、行政官を増加させた。その意図は、養育が困難な事由がある場合は、当面国の施設に預けてはどうかと女性に説得を試みるためであった (Havelková, 2014, 42)。すべての人が平等に労働者になるという社会主義の理念は覆され、結婚、家族、子育てこそが社会主義社会の中心課題であり続けていると、社会主義理念そのものが再定義された (Havelková, 2014, 39)。

##### (2) 同調する社会認識

このような退行に対して女性の側から大きな反発が起こらなかったのはなぜか。必ずしも、思想統制下であって自由な表現活動が認められていなかったからのみではない。もちろん、1960 年代に西側で活発になり始めたフェミニズム思想に影響を受ける可能性もあり、フェミニズム思想・フェミニズム運動は資本主義が生み出した思想・運動、ブルジョワ文化活動であるという認識から、その波及に関しては厳格な統制が敷かれていた。

反発が生じなかったのは、労働と家事・育児を担うことに女性が疲弊していたからであると指摘されている (Havelková, B., 2014, 40)。当時、過労やストレスにより、片頭痛やノイローゼ等の症状のある女性が多かったと言われる。女性の雇用促進に貢献していた女性団体の主張の中にも、女性が働かずに育児に専念する選択肢もあるべきとする意見が出始めた (Havelková, B., 2014, 40)。

さらに、思想的抑圧が強化されるにつれ、家庭が重要な存在となったことに、反発が表れなかった最大の要因がある。チェコスロバキアは 1960 年代にはソ連型社会主義から逸脱し、若干の自由化を認めた独自の社会主義路線を目指すようになった。ソ連

にとっての背信行為は、1968年「プラハの春」におけるソ連の軍事介入と粛清を招き、その後は正常な社会主義と厳格な思想統制の中に置かれることになる。職場においても路上においても、信条の違反が発見されればいつ密告されるかもしれない、だれが密告者なのか分からない状態が常となった。そうになると、外のトラップから逃れることができる唯一のシェルター、真実の感情と意見を吐き出すことができる場合は、家庭のみであった。また、家庭には自由と道徳のみならず、社会主義が招いた物資不足を補う隠れた自給自足共同体としての重要な機能があった（Havelková, B., 2014, 45）。外の世界に価値を見出さない人々が家庭に真の社会と物心両面の充足を見出したからこそ、女性は家庭にいることを受け入れたと言える。

### 5. スポーツの祭典におけるジェンダー表象

トラクター運転手に始まる社会主義女性像は、1960年代から1980年代にかけての社会主義政策の転換に伴い、いかに変容したのか。社会主義を象徴するスポーツの祭典の中に見出してみることにする。

旧社会主義圏におけるスポーツの祭典であるスパルタキアード（Spartakiáda）は、オリンピックを貴族的性質として批判的に捉え、労働者の国際的結束を目的として発足した（注5）。旧社会主義国の中でスパルタキアードを定期的に開催していた国は多くはないが、チェコスロバキアでは1955年から5年おきに開催されていた。

スパルタキアードは、様々な集団・年齢の参加者による大規模なマス運動である。チェコスロバキアにおける同様の運動としては1862年に始まったソコル（sokol）があるが、ソコルは民族復興運動を背景に、チェコおよびスロバキア民族の再生と結束を象徴するマス運動として誕生し、社会主義期にはそのブルジョワ的性質から衰退していた。ソコルは男性のみの競技とされており、数千人によるシンクロした器械運動と洗練された身なりや動きに特色があった。1869年には女性のマス運動としてスレット（slet）が始まった。男性のソコルとは異なり繊細さと優美さを表現する、バレエ的な女性らしい動きを中心としたマス運動であった。

スパルタキアードは、ソコルやスレットと同じマス運動ではあるが、労働者解放をテーマとしたという点において性質が異なる。また、スパルタキアードは党のプロパガンダ映像として編集されていたので、その編集映像から社会主義政権が構築したジェンダー・イメージを読み取ることができる。

### (1) スパルタキアードに見るジェンダー克服

1950年代のスパルタキアードは、社会主義イデオロギーを忠実に再現した大会であったと言われる。たとえば、1955年スパルタキアードをロウバルは「工場モデル」と呼んでいる。労働者階級が支配する未来を表現しており、ジェンダーによる断絶を克服していると言う（Roubal, 2014, 142-143）。「新時代への転換」と題した共学の職業学校生徒（14～18歳）によるパフォーマンスはその一例である。男女が同じフィールドで演じていることも、それまでのマス運動では見られないことであったが、男子学生が工業の象徴として歯車を形成し、女子学生が農業の象徴としてトウモロコシ畑の波型を形成するところに、社会主義的な特色があった（注6）。ジェンダーの断絶を克服しているとみなされる観点は、スレットでは女性の表現形態と見られていた円形を男性のムーブメントで用いたこと、またそれぞれのジェンダーに特有の身体表現に焦点化されることがなく、あくまでも集合としてのムーブメントと作り上げた象徴、すなわち歯車とトウモロコシ畑に焦点化されていた点にある。

1960年のパフォーマンスでは、男女が一様にパラシュートを模したムーブメントを演じており、ジェンダーによる差異は全く表現されておらず、協働者としての男女が社会主義国家を形成するというイメージのみが表現されていた（Roubal, 2014, 144）。

### (2) スパルタキアードに見る女性像の変化

母親としての女性の役割が重点化される1960年代以降、スパルタキアードにおける女性の表現活動は、スレット期のテーマ、民族的統一性と民族復興運動期の女性へと回帰する。女性が民族復興において果たす役割は、チェコ・スロバキア料理を作り、それにまつわる物語や歴史を子どもたちに伝承することであるとされた（石倉, 2014, 5）。すなわち、スレットが表現していた女性は、ハプスブルク帝国下において都市からは姿を消し農村に生き残っていたチェコ・スロバキア農村文化を担う母親像である。

1965年スパルタキアードの演目「花咲く我が祖国」では、12歳から14歳の女子が、リボンと花を手にして優美な表現を中心としたリズム運動を行いながら、女性の象徴である輪、カーブ、波などを形作った（Roubal, 2014, 148）。スメタナ、ヤナーチェク、ドボルザークといったチェコスロバキア作曲家の音楽をBGMとして、農村風景と歴史を女性の身体と結びつけ、女性を通して民族性を表現しようと試みている。女性の表現活動には、すでに社会主義労働者としてのイメージは込められておらず、国家

の女性、民族の母という意味合いが強く込められていた。女性のパフォーマンスに求められるのは、美の表現であり（注7）、その美しさに社会共通の財産としての価値を見出していた（Roubal, 2014, 155）。

社会主義後期になると女性らしい優美さを表現する傾向は一層顕著になる。その代表例とされる1985年スパルタキアードを用いたプロパガンダ映像の中には、労働力、力強さの象徴としての男性、優美さと賞賛の対象としての女性が対照的に編集されている。その構成は次のとおりである（Roubal, 2014, 151-152）。

①ドボルザークのスラブ舞曲に合わせた女性の美容体操（注8）。緑色のロングスカートを着用した女性がチェコスロバキアの象徴であるライムの葉を形作る。②白いシャツを着用した日焼けした兵士風男性の力強い入場（BGMなし）、組体操。③母親に連れられた3歳から6歳の子どもの自然な入場、簡単な器械運動。④「花芽」と呼ばれる11歳から14歳の少女のパフォーマンス。ポップシンガーの音楽に合わせた優美な動きからなるリズム運動とマス移動。

このプロパガンダ映像は、労働者である男性、元気な子ども、将来の母たる美しい女性、およびそれら全体として幸福な家庭と国家を表現していると言われる。とりわけ将来の母たる若い女性による④「花芽」は総勢1万3,824人と最も参加者が多い演目であり、最大の見せ場とされた（Roubal, 2014, 142-143）。1950年代のスパルタキアードを用いたプロパガンダ映像は、遠景を中心とした構成であり、集団で形成した歯車やトウモロコシ畑に社会主義の象徴を見出していたが、「花芽」映像では女性の表情や動きなど人物に焦点化される傾向にあった。すなわち、男性のパフォーマンスは労働力を象徴するのに対し、女性のパフォーマンスは美しい女性として個々に賞賛される対象であったと考えられる（注9）。なお、参加女性の多くは、そのような賞賛の対象となることを好意的にとらえ、むしろ誇りに感じていたという（Roubal, 2014, 156）。

## 6. 社会主義後期の理想的女性像

スパルタキアードで表現されていた民族の母や賞賛の対象となる美しい女性像は同時期の他のメディアの中にも見出すことができる。

理想的母親像を端的に示しているのが、国際女性デーにおける表彰者である。毎年、産業、農業、教育、文化の最前線で活躍する女性、および人民軍において顕著な活躍があった女性が大統領府において表彰を受けた。その儀式は、多くの子どもを育てて

いるという理由で模範となるべく25人の母親の表彰に続いた。1989年国際女性デーで表彰された25人の母親のうち、4人を対象としてルデー・ブラヴ紙（*Rudé Právo*）がインタビューを掲載した。その4人は全員が党员であり、うち2人は9人、1人は4人、1人は11人の子育て中の女性であった。彼女達に対しては「家族の世話を担っているのみならず、仕事にも就き、公共に貢献している。いまだ退職の予定もなく模範的労働者」との評価が与えられていた（Oates-Indruchová, 2014, 193）。家事・育児という国家の母としての使命を果たしている上で仕事と政治活動を行っている女性像である。

一方で、1980年代のフィクションの中では社会主義への反発として中産階級の女性が描かれる傾向もみられた。1988年発刊の小説『知られざる理由』（Frybová, 1988. *Z neznámých důvodů. Pudná u Prahy*）で描かれたヒロインは以下のような女性として描かれている。家事、特に料理を毎日完璧にこなし、夫を家事に関与させることはない。職業は科学者で、仕事に熱心である。彼女の好みや環境、身に着けるものはブルジョワ的で、政治的には誤った志向性を持っている（Oates-Indruchová, 2014, 197-198）。そして、あらゆるシーンにおいて、彼女の美しさと優雅なセンス、身のこなしが強調され、男性の視点から賞賛される。

この主人公の生活スタイルは、戦前の都市中産階級が羨望する女性像にも等しい。女性の高等教育への機会を切り開いたクラスノホルスカーらによる女性運動に感化され、高度な教育を受けて、教員や医師などの専門職に就くことを望んだ中産階級女性である（石倉, 2012, 8）。主人公は、反体制の女性像であるが、優美で家事能力が高いという点は1980年代スパルタキアードで表現されている女性像とも等しい。ゆえに、1980年代の社会主義国家が理想とするイメージともとらえられるのである（Oates-Indruchová, 2014, 198）。

のみならず、主人公は職業という点においても社会主義的理想である。1950年代のスパルタキアードで表現されていた、男性の協働者として農業・重工業で直接生産に携わる労働者は、理想の女性像ではない。とりわけ重労働は、社会主義が最も価値を付与する仕事であるが、身体保護のためとして法的に女性を排除していたゆえに、男性の特権的職業となっていた。1985年スパルタキアードが示するように、日焼けした力強い重労働者というイメージ、社会主義最高の荣誉が与えられていたのは男性なのである。翻って、主人公は科学者、ホワイトカラーであり、その中でも最も低位置に属する知識階級である。すなわち、彼女の職業は、社会主義労働

ヒエラルキーの上位であるブルーカラー、労働力の主役たる男性の領域を犯すことがない好ましい「他者」の領域にある点で、理想的なのである。

この二つの事例から、社会主義後期の女性像が、民族復興期の女性像のみならず、前社会主義中産階級的女性像にも近似したことを見てとることができる。すなわち、社会主義後期に至って形成された理想的女性像とは、男性イメージとの共通項をもたない労働者である。家事・出産・育児という使命を果たし、強さが評価される男性においては評価されない優美さをもち、男性の領域を犯さない職種に就く好ましい労働者である。そして、前社会主義的女性像が社会認識から払拭されることなく温存していたことは、社会主義改革が真の意識変容を伴わなかったことを示唆している。

## 7. おわりに

社会主義施策の問題点は、政策ありきの女性労働解放にすぎず、男性・女性共に意識変容を伴っていなかったことにある。ゆえに、少子問題を女性の問題とみなし、女性と母性・家庭への縛りを社会的に作り上げたが、女性からは反発もなく受け入れられることになったのである。女性のイメージは、社会主義改革の象徴とも言えるトラクター運転手から多子の母へ、あるいは男性とは異なる領域に属する他者、ホワイトカラーに就く優美さのある女性へと変容した。ポーヴォワールは、女性を男性にとっての他者、第二の性と表現したが、社会主義においても女性は第二の性にすぎなかったと言えるのではない。

とりわけ、社会主義の事例によって示されていることは、社会的労働における男女の平等より家庭内の平等のほうが達成しがたい課題であるという点である。原始社会においてさえ、「生殖上の様々な拘束は女にとって相当なハンディキャップになっていた」とポーヴォワールが指摘したように（ポーヴォワール, 1997, 92）、出産・育児により生じる女性のライフスタイル変容は、いかなる社会においても最終的な課題として立ちはだかるのかもしれない。

なお、すべての人々を平等な労働者ととらえつつ、社会主義国家として発展することが成し遂げられなかったために、女性の役割やイメージが変容した点は、他の東欧諸国においても共通する事項である。東欧旧社会主義国の比較研究を通して、社会主義が生み出した女性の問題をより顕在化させること、社会主義以後の女性の問題にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを今後の課題としたい。

本研究は、2019 - 2021 年度科学研究費助成事業「若者文化の中で再生産されるジェンダー・ストーリー - チェコと日本の比較 -」（基盤研究 C・19K02532）の成果の一つである。

## 注釈

1. 1969年、女性生産年齢(15-55歳)に占める雇用率はチェコスロバキアで80%であり、旧ソ連、東ドイツに次ぎ世界3位(Nečasová, 2014, 78)。
2. 池田(1966)によれば、K女子大学国文学科の4年生39人を対象とした調査(1965年)では、「職業につきたい」6人に対し「つかない」29人(池田, 1966. 女子大学. 日経新書)など、家庭に入ることを志望する傾向性の高さが示されている。また、1960年代の労働省婦人少年局統計によると、勤務年数は女子大学出身で平均2.8年、女子短期大学出身で平均3.4年であった。
3. フランスでは1971年、著名人を含む343人の女性が「中絶宣言」においてタブーを社会問題にした。1974年、女性問題に取り組むことを訴えたデスタン政権において、ヴェイユ保健相が中絶を認める法案を議会に提出し、男性議員のヤジや侮辱を受けつつも、1976年、避妊を認めるヴェイユ法を成立させた。しかし、教会、保守派、人口推進派などの反対が根強く、施行まで3年以上を要した。
4. 1950年設立エレクトロ・プラハ・フリンスコ(Elektro-Praga Hlinsko)、1952年設立プラハ・コヴォテフカ(Pražská Kovotechka)、1962年設立ETA。
5. 冬のスパルタキアード国際大会はオスロで1928年2月、夏のスパルタキアード国際大会はモスクワで1928年8月に開催されたのを始まりとする。
6. 男子生徒は濃紺のユニフォームを着用して労働力を表現し、女子生徒は白いブラウス、ミニスカート、黄色いスカーフを着用して純粹・無垢を表現しており、必ずしもジェンダー・イメージから解放されていたわけではないことも指摘されている(Roubal, 2014, 141-142)。
7. 優美さが評価されたことは東欧社会主義諸国に共通ではない。たとえばルーマニアでは、内面と外面に農村女性の禁欲的な慎ましやかさが強いされていた。TVや雑誌等メディアで検閲を通過するのは、慎ましやかな装い、長袖詰襟、長いスカート等を着用した女性であった。女性のモデルとなる党员は、華美な装いや化粧により女性としての魅力を醸し出すことは許されなかった。
8. 身体美を作ることを目的とした身体運動。
9. 1980年のプロパガンダ冊子のイントロダクションには「観客は、日焼けした兵士が白シャツを身に着け、勇気と強さ、若い社会主義国家市民としての意識を身体で見事に表現すると、そのパフォーマンスに誇りを感じた。そして、観客は女性の運動、若い女性の踊りに魅了され、3歳から6歳の子どもを連れた親子パフォーマンスを見

るにつけ、感情を隠すことができずに、目には涙を浮かべた。」と記されている(Roubal, 2014, 153)。

### 引用文献

石倉瑞恵. 2012. 19世紀チェコにおける女子高等教育の成立と女性医師の誕生 —エリシュカ・クラスノホルスカの思想と活動を中心に—. 名古屋女子大学総合科学研究. 6:4-13.

石倉瑞恵. 2014. チェコ女性労働者の権利をめぐるカルラ・マーホヴァの思想と活動 —啓蒙と連帯から参政権運動へ—. 名古屋女子大学総合科学研究. 8:16-24.

石倉瑞恵. 2017. チェコ的女性研究者をとりまくジェンダー格差に関する考察 —社会主義の功罪を中心に—. 石川県立大学年報. 平成28年度:35-45.

石倉瑞恵. 2021. 大学生が受容・内在化するジェンダー—主流イメージの再生産と脱主流への葛藤—. 石川県立大学研究紀要. 4:107-116.

ポーヴォワール, S. (井上たか子・木村信子 訳). 1997. 第二の性 I 事実と神話. 新潮社.

マルクス, K., エンゲルス, F. (大内兵衛・坂逸郎 訳). 1995. 共産党宣言. 岩波文庫.

Burešová, J. 2016. Historické kořeny genderové nerovnosti v podnikání a pracovním trhu. in Slavičková, P. (ed). Ženy-podnikatelky v minulosti a současnosti. Nakladatelství lidové noviny. Olomouc. 17-51.

Funk, N., Muller, M. (ed). 1994. Gender politics and post-communism Reflections from Eastern Europe and the Former Soviet Union. Routledge.

Glos, G.E. 1985. The Czechoslovak Civil Code of 1964 and its 1982 amendment within the framework of Czechoslovak Civil Law. New York Law School journal of international and comparative law. 2(6).

Havelková, H., Oates-Indruchová, L. 2014. Expropriated voice: transformations of gender culture under state socialism: Czech society 1948-89. in Havelková, H., Oates-Indruchová, L.(ed). 2014. The politics of gender culture under state socialism. Routledge. London. 3-19.

Havelková, B. 2014. The three stages of gender in law. in Havelková, H., Oates-Indruchová, L.(ed). Ibid. 31-56.

Nečasová, D. 2011. Po druhé světové válce, in Randák, J. a kol. 2011. Dějiny Českých Zemí. Knižní klub. Praha. 319-409.

Nečasová, D. 2014. Women's organizations in the Czech lands 1948-89: an historical perspective. in Havelková, H., Oates-Indruchová, L.(ed). Ibid. 57-82.

Oates-Indruchová, L. 2014. The beauty and the loser: cultural representations of gender in late state socialism. in Havelková, H., Oates-Indruchová, L.(ed). Ibid. 188-210.

Petrov, M. 2013. Retro Co bylo (a nebylo) reálného socialismu. JOTA. Brno.

Petrov, M. 2015. Retro 2 Jak jsme si to žili za reálného socialismu. JOTA. Brno.

Radnák, J., Petrbock, V. 2011. Dlouhé století. in Randák, J. a kol. Ibid. 193-261.

Roubal, P. 2014. The body of the nation: the Czechoslovak Spratakiades from a gender perspective. in Havelková, H., Oates-Indruchová, L.(ed). Ibid. 135-161.

Šťastná, R. a kol. 2017. Vzpomínkomat. Bizbooks. Brno.



# The Process of Transformation of the Female Image in Socialist Czechoslovakia

Ishikura, Mizue (Liberal Arts Education Center, Ishikawa Prefectural University)

## Abstract

Did socialism overcome gender and lead to women's liberation? This paper examines the nature of women's liberation during the socialist period in Czechoslovakia, focusing on transforming of the female image as workers. Socialism dismantled the traditional family system and promoted women's employment, but not all of its measures were intended to liberate women but rather to build a healthy and robust socialist state. When the trend toward fewer children became apparent with the increase in the number of working women, legal reforms retreated from women's liberation. The socialism was reinterpreted as marriage, family, and child-rearing became an essential task.

An analysis of the female image as represented in the media in the late socialist period, focusing on the female image as represented in the national celebration called Spartakiáda, reveals the following points. First, the female image was transformed from blue-collar workers on state farms in early socialism. The ideal woman was a worker who fulfilled her housework, childbirth, and childcare duties, who had a gracefulness that was not valued by men, who valued strength. In addition, they were white-collar workers in intellectual and other occupations, workers who did not violate the male domain. The ideal female image can be described as “the second sex” who did not have anything in common with the male image.

Keywords: Czechoslovakia / socialism / gender / female image / family